

エディトリアル

台東区立台東病院 病院長 杉田義博

地域の、特にへき地の診療所に勤務していると、その地域におけるさまざまな問題が持ち込まれ、「よろず相談所」の役割を担わなければならないことがある。法律や医療・介護保険などさまざまな制度の隙間に落ち込むケース、自己判断が適切でないため最適な対処ができないケースなど、誰もが経験しているだろう。しかし問題の存在に気づかなければ解決の糸口すら見いだせない。誰かがまず気づくこと、気づいて見て見ぬふりをせず、できることを駆使して解決しようとするのが重要である。そのためには知識と経験が必要だ。

今回はさまざまな分野の専門家に、地域で遭遇するいわゆる困難事例について解説していただいた。まず高齢者の抱える問題を岐阜県恵那市の中核病院で地域包括ケアに取り組んでいる細江雅彦先生に、退院調整の実例を中心に解説していただいた。続いて小児の問題を取り上げた。小児難病・障害児については、長く重症児の訪問診療に取り組まれている高橋昭彦先生に専門医療機関とかかりつけ医の併診体制の重要性と、制度が脆弱な小児の在宅医療にプライマリ・ケア医が関わるための具体的なアドバイスをいただいた。小橋孝介先生には解決の糸口が見えないように思える小児虐待の問題に対して、プライマリ・ケア医が気づくこと、行動することの重要性を教えていただいた。成人分野にも対応困難ケースは多い。いわゆる神経難病については森脇俊先生に最近改正された法律等の制度と、実際の支援体制について述べていただいた。西倉秀哉先生、岩田和彦先生には身体疾患を専門とする医師が持ちがちな精神疾患患者への偏見を、メタボと睡眠障害というcommonな疾患を通して解くコツを明かしていただいた。経済的な問題で適切な医療や介護を受けられない、あえて受けない、といったケースもある。井上直子さんには行政の立場で関わる生活困窮者に対する自立支援制度を解説していただいた。「発見のネットワーク・支援のネットワーク」「我が事、丸ごと」というフレーズは、今特集を通して、また地域包括ケアシステムにおいても重要なキーワードであると思う。外国人に対する医療経験豊富な沢田貴志先生には、急増する観光客だけでなく、すでに地域で生活している外国人に対する医療提供について詳しく解説していただいた。

この特集をもって「困難事例へのアプローチ」と題したことは適切ではなかったかもしれない。これらは決して困難事例ではなく、どこにでもある、日常遭遇する事例であった。それを困難と感じるのはわれわれが作る壁……無理解と偏見なのだろう。私たちの内なる壁を取り払うことが最も重要だ。その一助となれば幸いである。